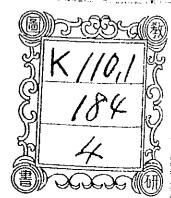
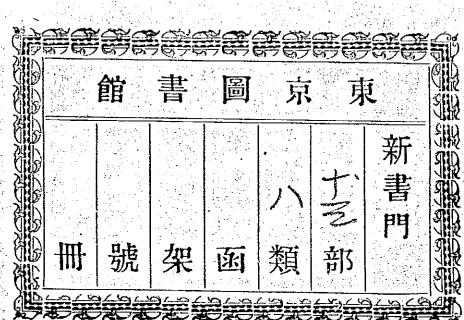


新撰 小學修身書 文學社編纂 嘉言篇 四



文學社編纂 嘉言篇

撰新小學脩身書

全冊一十

東京大坂
文學社發兌



撰新小學修身書卷之四

文學社編纂

第四章

○仁、義、禮、智、信、

是を五常といふ、

○五常は人の性にて萬善の根

源なり。

仁とは、人を愛し物を憐むをいふ。

義とは、宜しきに従ひて事を處するをいふ。

禮とは、次序品節あるをいふ、
智とは、善と惡とを知り分くる

をいふ、

右を四德といふ、

信は、此の四德に實あるなり、

○朱熹曰、己か心を盡すを忠とい、
己を推して人に及すを、恕と爲す、

○佐藤坦曰、人を責むること深き
者は、必自恕す、己を責むること深

き者は必薄く人を責む。
○范純仁曰、人至愚なりと雖、人を
責むるは明なり、聰明なりと雖、己
を恕するは昏।

○呂本中曰、君に事ふるは、親に事
ふるか如く、官長に事ふるは、兄に
事ふるか如し。

○程頤曰、此の邦に居ては其の大夫
を誹らすといへる、此の理最好。」
○呂本中曰、官に當る法、唯三事あり、
曰清、曰慎、曰勤、此の三の者を知れ
は、身を持する所以を知る。

○禮義あれは、貧賤なりと雖、人亦
之を敬仰り、禮義なけれは、富貴な

りと雖、人亦之を鄙賤す、諸儒論

小學

○荀況曰、幼にして敢て長に事へす、賤にて敢て貴に事へす、不肖にて敢て賢に事へさるは、是人の三不祥なり。

○人譽むれば我謙す、又一の美を増すなり、自誇れば自敗る、又

一の毀を増すなり、續小見語

○范益謙曰、人書信を附せば、開拆して沉滯すへからず、

○又曰、凡人の物を借りては、損壊して還すへからず、

○顏之推曰、人の典籍を借らば、皆須らく之を愛護すへ、

○佐藤坦曰、多言すること勿れ、多言すれば、己の業を怠るのみならず、人を妨くることあり慎むべし、

○凡童子は、常に口を緘一て静黙すべし、輕忽に言を出すこと勿れ、

習童子

○張思叔曰、字畫は必楷正、容貌は必端莊、衣冠は必肅整、步履は必安詳、居所は必正靜なるべし、

○胡安國曰、事に臨みては、明敏果斷を以て、能く是非を辨す、

○古語に曰、後生才の人には過ぐる者は畏るゝに足らず、惟書を読み

て尋思する者是畏る——、
○室直清曰、小人は、眼前の利を見て之を悦び、君子は、未然の害を見て之を恐る、

○細事と雖亦まさに難きを以て之を處す——、忽にす——からず、況んや大事をや、讀書録

○貝原篤信曰、事を爲すには深く思案をこらへて、輕卒に決定す——からず、

○天子より庶人に至るまで孝に終始なく——て、患の及はざる者は、未これあらず、孝經

○舟にて游かす、道にて徑せ

す、身は父母の遺體なり、之を行ふに敢へて敬せざらんや。小學詩禮

○愛敬は人倫を厚くする道なり、父母を愛敬するは又其の本なり、

錄慎思

○佐藤坦曰、臨時の信は功を平日より重ね、平日の信は効を臨時に

收む

○貝原篤信曰、人の誠ならざる所は、多くは言の上にあり、信を守るには、言語に心を用ひて、實を以てすへ一、

○松平定信曰、學問の道は、唯五常五倫を守り、善を一て不善を爲さ

るにあり、

○貝原篤信曰、人の學問する所以の要二つあり、其の知らざる所を知り、其の已に知る所を行ふなり、

○又曰、技藝は譬へは木の枝葉なり、學問は譬へは木の根本なり、

○書を讀むには、首とて志を立

つるを要す、志を立つるには堅き
を貴ふ、堅く一て恒あれは、其の學必

成る、讀書法

○王守仁曰、志立たずしては、天下
に成るへき事なし、百工技藝と雖、
志に本つかざる者あらず、

○凡人志ある者は、遂に能く礪磨

一て以て素業を成す、顏氏

○中井誠之曰、人志を立されは、是に移り、彼に變へ成るある者少く、人は志を確定一て、事を遂さる一からず、

○張知伯の曰、人の常情、儉より奢に入るは易く、奢より儉に入るは

難一。

○貝原篤信曰、衣服は儉素にて、飾少く、世の常に一て賤からざるを宜一とす、

○又曰、質樸に過ぎて、穢は一く野鄙なるも惡一、

○又曰、貧一き入一務めて垢つき

穢れざるを用ゐる一、

○心に暫くも正理を離る一からす、身に暫くも正道を離る一からす、
（讀書録）

○密室に坐するも、通衢の如くす、心を馴するも、六馬を馴するか如くすれば、以て過を免る一、
（同上）

○張思叔の坐右の銘に曰、凡語は必忠信、行は必篤敬、飲食は必慎節す、

○古語に曰、善に從ふは登るか如く、惡に從ふは崩る（小學）か如し、

○呂本中曰、一行、一住、一語、一默、須らく道に合はんことを要す一、

○世に處するには多言を戒む多
言なれば必失言あり、治家

格言

○喜に乘て多言すへからず、快
に乘て輕易に行ふへからず、讀書

錄

○性躁かへく心粗暴なる者は、一
事も成すことぬれ、心和き氣平な

る者は、百福自集る、菜根談

○葉仲圭曰、躁擾輕浮なれば、知る
所の者も忘れ易く、守る所の者も
失ひ易い。

○蘇頌曰、人生は勤むるにあり、勤
むれば匱へからず、戸の樞は蠹せ
す、流水の腐らざるは是其の理なり、

○貝原篤信曰、富める人す美麗を好みて、無用の服を多く造る一からす。

○君子は、人の美を成して、人の惡を成さず、小人は之に反す。論語

○君子は、言を以て人を擧げず、人を以て言を廢せず。上全

○後陽成天皇曰、難の中にて難を樂めは難なく、貧の中にて貧を樂めは貧なり。

○林和靖曰、心清からずしては、以て道を見ることがない、志確からずしては、以て功を立つることなし、

明治十五年十月五日版權免許
同十七年十二月出 版

建物五號

編纂兼
出版發兌

文 學 社
東京本町四丁目十六番地
文學社支店
大阪本町三丁目十六番地

發賣

141101